

## 市内に伝わる中世武士 上溝・下溝地区の「横溝五郎」の伝承について

木村 弘樹

### はじめに

相模原市における中世史は、建保元年（1213）の和田義盛の乱により市内及び周辺に勢力を保っていた横山党が衰退して以後、一部断片的な史料が残る（注1）のみで、16世紀の小田原北条氏の登場まで不明な部分が多い。そうした状況の中で、江戸時代後期の『新編相模國風土記稿』や、明治初期の『皇国地誌残稿』（注2）など、近世以降の市域の地誌類などに、何人かの中世武士が伝えられている。その主な人物としては、鎌倉時代初期に源範頼の家臣として登場する当麻太郎、南北朝期の淵野辺の地頭と伝えられ、龍退治伝説や護良親王を害したとされる淵辺義博などである。そして、もう1人今回筆者が紹介するのが「横溝五郎」という中世武士である。横溝五郎は、上溝と下溝の両地域の地誌等に登場し、地元にはいくつかの伝承が残されている。本稿では、上溝・下溝両地区の伝承をあらためて紹介するとともに、市域以外の史料に登場する「横溝五郎」についても記述していくこととする。

### これまでの研究

これまでに横溝五郎の伝承を中心に述べられた報告などはなく、『相模原市史 第1巻』や『相模原歴史人名事典』にも紹介されていない。しかしながら、次の文献内の一部で横溝五郎または、その伝承地などについて紹介されている。

まず、相模原市教育委員会で発行した『地名調査報告書』の「旧上溝村」の項で、旧名の小字名「中丸」、「的場」、「丸山」に横溝五郎の伝承が残るとの記載がある。

次に、同教育委員会発行の『相模原の城館址』では、「まとめ」の中で、「横溝氏にかかわる伝承、遺構ともに確認できなかった」と記しながらも、『下溝村皇国地誌』（注3）における「在昔溝呂木城（横溝五郎所在）ノ址ナリ」や、『上溝村字地書上』（注4）の「丸山（横溝五郎構内ト伝ヘリ）」など、両地域の地誌の記載を紹介している。

次に、上溝公民館発行の『かみみぞの史跡と伝説をたずねて』では、「上溝城」の項に、「正応年間（1288～1292）に横溝五郎大夫が丸山という地の西南に城を築いた」との記載があり、現在は城の形跡は全くないとも記されて

いる。

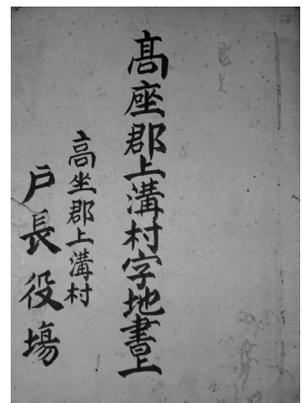
また、『溝呂木の遺跡』（注5）の中で小島瓔禮氏は、15世紀後半の太田道灌状に登場する「溝呂木城」について、『下溝村皇国地誌』の記載などをもとに、厚木市内と考えられている溝呂木城の場所について疑問を呈している。さらに、小島氏は、『吾妻鏡』に登場する「横溝五郎資重」や『太平記』に記された「横溝五郎入道」など横溝を称する武士についても触れている。

### 上溝における横溝五郎伝承について

上溝において横溝五郎の伝承が記されているのは、明治初年（1868）の『上溝村字地書上』と同9年（1877）の『上溝村皇国地誌』（注6）の両書である。

#### ① 『上溝村字地書上』

この資料には、上溝村内の各字名の位置、畑地など土地の利用形態、旧地名、そして一部の伝承などが記されている。その中で、何箇所かに次のとおり横溝五郎の名が登場する。



上溝村字地書上

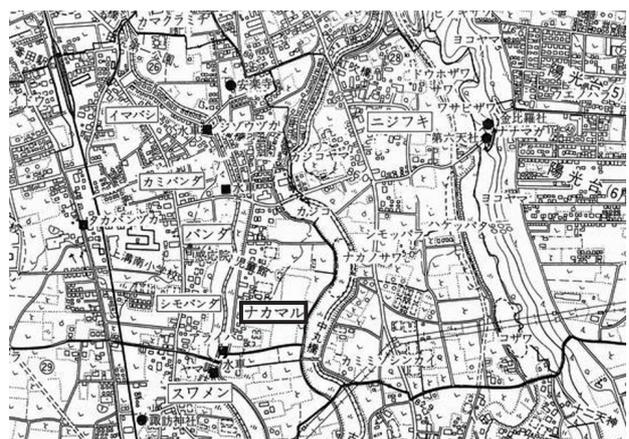


図1 上溝村 ナカマル付近

ア 「字甲四号」

文中の旧字「中丸」の説明として、「中丸（横溝五郎邸内ト伝エリ、尤モ東西ニ姥川鳩川ヲ構ヘ丸ニ等キケ所ナリ）」とある。旧字中丸は、図1のとおり上溝南小学校の東側の鳩川とさらに東側の姥川に挟まれた地域で、現在も姥川に中丸橋という橋が架かっている。この記載によれば、「中丸」が横溝五郎の邸内＝館跡であったという伝承が残り、しかも鳩川と姥川を天然の堀とした「丸ニ等キケ所」（＝城館と同じような場所？）と伝えられている。

イ 「字甲六号」

文中の旧字「的場」の説明として、「的場（横溝五郎ノマトバトアリ）」とある。的場は、『地名調査報告書』によると地点不明とあるが、『かみみぞの史跡と伝説をたずねて』の「上溝城」の項においては、上溝中学校内のプール付近に「的場」、食肉公社の付近に「松葉」（＝マトバが転じた地名）という地名があると記している。「字甲六号」は現在の上溝駅付近から亀ヶ池八幡宮周辺の地域にあたるので、その範囲内となるが、この範囲には「ウマザカ」や和田義盛の伝承がある「ワダザカ」などがある。また、上溝駅の北側には「ババイケ」という池がかつてあったとされ、「馬」関連の地名が多いことは興味深い。

ウ 「字丙六号」

文中の旧字「丸山」の説明として、「丸山（横溝五郎構内ト伝エリ）」とある。旧字丸山は、図2のとおり現在の上溝中学校のあたりで地形的にも段丘上にあり、城館にふさわしいように感じる場所である。そのため、『相模原の城館址』の「まとめ」でもその場所を「丸山城」の伝承地とし、また『か

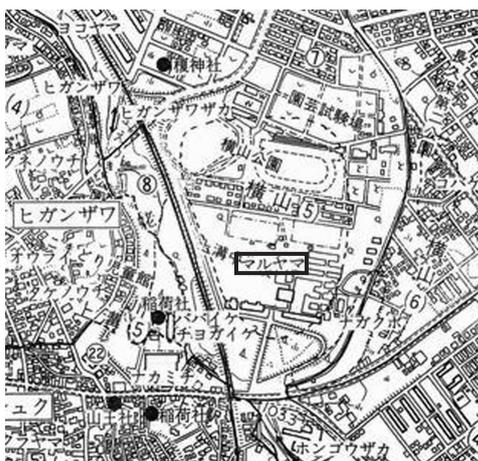
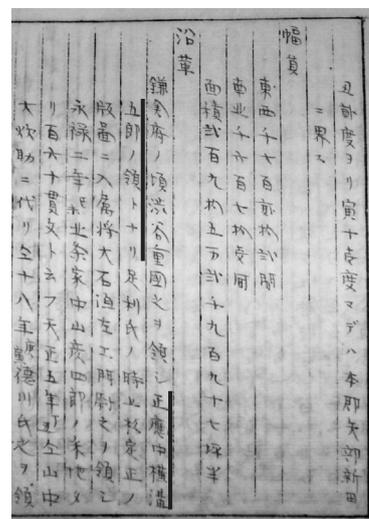


図2 上溝村 マルヤマ付近

みみぞの史跡と伝説をたずねて』では大胆にも「上溝城」とまで表記している。

② 『上溝村皇国地誌』

『上溝村皇国地誌』には、村の位置、広さ、沿革、税対象地、戸数、人員、山川、橋、社寺、学校など当時の村内の状況が詳細に記されている。横溝五郎については、その「沿革」の項目に「鎌倉府の頃 渋谷重国之ヲ領シ、正応中横溝五郎ノ領トナリ



上溝村皇国地誌 沿革に「横溝五郎」とある

…」との記載がある。記述はわずかであるが、注目すべきは「正応中」との年代表記が記されていることである。「正応」とは、西暦1288年から1292年で、鎌倉時代の後期にあたる。上溝の安楽寺には市内最古の「正応五年」（1292）の銘が残る板碑があることから、この年号が『皇国地誌』に採用された可能性も考えられる。板碑をつくるにも石材入手～加工まである程度の財力が必要と考えられることから、板碑の造立が可能な地頭などの存在が窺える。



安楽寺の正応五年銘の板碑

『皇国地誌』には、『上溝村字地書上』のように具体的な伝承地は記されていないが、明治9年当時の段階で鎌倉時代後期に横溝五郎が上溝の地頭であったとの伝承があったことは間違いがない。

下溝における横溝五郎伝承について

下溝において横溝五郎の伝承が記されているのは、明治12年（1879）の『下溝村皇国地誌』で、『上溝村皇国

地誌』同様に当時の下溝村内の状況を知る貴重な資料である。横溝五郎については、まず「沿革」の項目に「鎌倉府の頃渋谷重国之ヲ領



天応院入口（すぐ脇を姥川が流れる）

シ、正応中横溝五郎ノ領トナリ…」と上溝同様の記載がある。これは、中世において上溝・下溝が溝郷として一つの単位として扱われることがあったためと考えられる。

そして、もう一箇所が「寺」の項目の「天応院」に関する説明で、「…昔有溝呂木城（横溝五郎所在）ノ址ナリ（古蹟ニ詳記ス）…」との記載である。さらに、「古蹟」の項に「溝呂木城址字申十三度字溝ヶ谷ニアリ、今天応院ノ境内是ナリ」と

あり、現在の天応院は横溝五郎がいた溝呂木城址に建てられた寺院であると記述されている。

溝呂木城については、室町時代の15世紀後半に起きた長尾景春の乱の中で、長尾方の城として「太田道灌状」（注7）や『鎌倉大草紙』（注8）に登場するが、溝呂木城については一般的には厚木市内と考えられている。しかし、



図3 下溝 天応院付近

小島環禮氏は、『下溝村皇国地誌』の記載や、図3のとおり鳩川と姥川の2つの河川が合流する付近で城郭地形にふさわしい点などを理由に、厚木市内される溝呂木城を下溝天応院があった場所と想定している。

なお、天応院北側の上記両河川に挟まれた地域にも、上溝の字甲四号同様に「ナカマル」という城館関連地名があり、天応院の伝承と合わせ大変興味深い地名である。

上記のように下溝では、横溝五郎所在の地として室町期の史料に登場する「溝呂木城」という具体的な城館と伝承が結びついていることが注目すべき点であろう。

### 横溝五郎などに関する記録及び地名調査の概要

次に、「横溝五郎」または「横溝氏」の名が史料にどれぐらい登場するのかを紹介してみたい。

#### ① 『吾妻鏡』

ア 承久3年（1221）5月22日

承久の乱における鎌倉幕府軍に従軍した武士として横溝五郎の名が記されている。

イ 貞応元年（1222）の正月7日

御弓始之儀の射手として「横溝五郎資重」、「横溝六郎義行」の名が記されている。なお、「横溝六郎」は翌2月の犬追物の射手としても登場する。

ウ 貞応元年（1222）7月3日

小笠懸の射手として「横溝五郎、同六郎」の名が記されている。

エ 貞応2年（1223）正月5日

御弓始之儀の射手として「横溝六郎」、「横溝五郎」の名が記されている。

上記のように、横溝五郎及び六郎は弓術に長けていた武士のようである。しかしながら、『吾妻鏡』からはその本領や、その他の情報などを知り得ることはできない。

#### ② 『太平記』

元弘三年（1333）5月12日の新田義貞と鎌倉幕府軍が戦った小手指原（所沢市）の合戦時に幕府方の参陣武将として「横溝五郎入道」の名が見える。また、同5月16日の新田義貞勢と幕府軍の関戸（多摩市）での戦いの中、幕府軍が劣勢で退く中、「横溝八郎」が踏みとどまり23騎を射落とした後に討ち死したとある。

この横溝五郎入道らが『吾妻鏡』に登場した横溝氏と関係があるか、また、本領がどこであるかなどは残念ながら不明である。

### 「横溝」地名について

「横溝」という地名について確認したところ、滋賀県東近江市横溝町と福岡県三潞郡大木町横溝という場所があり、いずれも横溝城なる城館址が伝えられている。東近江市横溝町は、旧湖東町の中心地で、領主横溝氏は佐々木六角氏の家臣とされる。また、福岡県三潞郡大木町の横溝城は、筑後国の戦国大名蒲池氏が領する城とされている。

どちらの場所についても、『吾妻鏡』や『太平記』に登場する横溝五郎らとの関連強い伝承はなく、ましてや相模原の横溝五郎伝承につながるようなエピソードも確認することはできなかった。

### まとめ

今回は、同じ明治初期に上溝・下溝の両地域に伝承を残す「横溝五郎」について紹介を行った。残念ながら、横溝五郎なる武士が相模原にいた実在の人物とする根拠はなく、現状では伝説上の武将と言わざるを得ない。

では、なぜこの伝承が生まれたか。それも今日においては解明することは難しい。ただ、明治初期は新政府が国内の状況を把握し統治のため、『皇国地誌』の作成等が命じられ、その中には、城館や古蹟などを記載することになっていた。そうした背景をもとに『吾妻鏡』などに登場していた横溝五郎なる人物と結びつき、この伝承が生まれたのではなかろうか。しかも、「横溝」という名前から、平安末～鎌倉時代初期に市域に進出した武士団横山党（注9）と、上溝、下溝という地名の関連を連想してしまうのは筆者だけであろうか。

いずれにしても、明治初期に上溝から下溝の広範囲に、何箇所もの「横溝五郎」伝承地があったのは間違いなく、住民にも少なからず「オラが村にも昔ある領主さまがいた」とのイメージが浸透していたと考えられる。そうした昔の領主さまへのイメージが、この後上溝・下溝に広まる横山将監、照手姫、小栗判官の伝説（注10）が定着する素地にもなっていたのかもしれない。

注1 史料としては南区新戸の長松寺に応永3年（1396）の寄進状などが残っている程度で、相模原の中世は未だに解明されていない部分が多い。

注2 『皇国地誌』は、明治政府が国土把握のため各府県に命じて村ごとの詳細な調査報告書の提出を命じたもので、最終的には未完に終わったが、各地に原稿が残り当時の状況を知る貴重な史料となっている。

注3 下溝の福田家に残されていて現在当館に寄託され

ている。

注4 旧上溝町役場資料として当館に所蔵されている。なお、上溝は明治初めにそれ以前の小字名を整理し、「甲一号」から「戊四号」まで29の小字を甲乙丙丁戊に〇号とした。

注5 厚木市の萩田印刷発行の『黄色いチラシ』平成24年8月1日号所収。

注6 旧上溝町役場資料として当館に所蔵されている。なお、資料表題は「相模国高座郡上溝村誌」であるが、中見出しには「皇国地誌」と記されている。

注7 文明12年（1480）に太田道灌が山内上杉氏家臣に宛てた書状で、長尾景春の乱の経過を知る貴重な史料。

注8 14世紀後半～15世紀後半の100年間の関東の歴史について鎌倉公方などを中心に記された軍記物。

注9 横山党が進出したとされるのは、周辺では田名、矢部、小山、相原、小倉などで、上溝に進出したとの伝承はない。上溝がある中段から上段にあがる段丘崖を「ヨコヤマ」と称しており、その地名が横山党と結びついたと考えられる。

注10 安政5年（1858）の「古山十二天社文書 壱号」に小栗照手姫伝説について記され、下溝の古山では皆この話を知っていると記されている。しかし、『新編相模國風土記稿』、『皇国地誌』などにその記載はなく、明治初期段階では広範囲（特に上溝）にはこの伝承が定着していないと考えられる。

### 参考文献

- 相模原市教育委員会 1971 『さがみはらの文化財』第6集 相模原の板碑
- 相模原市教育委員会 1984 『地名調査報告書』
- 上溝公民館 1986 『かみみぞの史跡と伝説をたずねて』
- 相模原市教育委員会 1987 『相模原の城館址』
- 小学館 1994 新編古典文学全集54『太平記1 巻一～十一』
- 吉川弘文館 1994・1995 新訂増補國史大系〔普及版〕『吾妻鏡 第二』、『同 第三』
- 相模原市 2010 『相模原市史 民俗編』
- 小島環禮 2012 「溝呂木の遺跡」 萩田印刷 『黄色いチラシ』平成24年8月1日号所収